

翻訳の理論には何が可能か：

翻訳の内部制約と外部制約の峻別により開ける新しい翻訳論の地平

吉川正人（慶應義塾大学大学院）

1. はじめに

翻訳という営みは実に複雑なものであり、そこには、原文の書かれた言語(=起点言語)とそれが訳される先の言語(=目標言語)の文法体系は勿論のこと、談話構造、文化・社会的背景、対象読者層、商業的な事情等、非常に多種多様な要因が作用してくる。このような複雑性が故に、翻訳を厳密な理論で語るのは一見不可能であるかのように思える。しかしながら、先に述べたような翻訳に関わってくる諸制約には、実は二種類のものか混在しており、そのうちの一つは確かに理論で語ることが不可能だが、残りの一つに関しては理論化が可能であるという可能性が考えられる。つまり、二種類の制約を峻別させてしまえば、翻訳の理論は可能になるかもしれない、ということである。

本稿では、以上のような想定から、まず、翻訳にかかる制約を内部制約と外部制約の二種類に峻別する¹。そしてその上で、前者のみを翻訳理論で扱い、後者は「翻訳研究」や「翻訳学」に委ねる、という「棲み分け」を提案する。内部制約とは、言語構造に関わる言語的な規則であり、いかなる状況でも訳者が守らねばならない、ほぼ無意識的なものであるが、外部制約とは、「どう翻訳するか」ということに関わる(主として)非言語的な制限であり、状況によって適切なものが選択され、意識的に働くものである。

2. 定義

本節では、「内部制約」「外部制約」というものに対し2種類の定義を試みる。一つは概念的定義であり、もう一つは操作的定義である。前者は「内部制約」「外部制約」というものがあまり一般的な概念でないために必要なものであり、後者はこの区別を利用して翻訳の理論を行う際に必要になってくるものである。

2.1. 概念的定義

まず内部制約の概念的定義を試みる。

¹ちなみに、翻訳ではなく言語一般に対しての内部制約と外部制約の峻別を示唆し、後者は所謂言語使用の理論であり、前者は統語論・意味論であるとする議論はKuroda (2000)に見られる。

内部制約とは、翻訳対象言語の言語構造や二言語間の(語句や文の)対応付けという「翻訳と言う作業内に閉じた」制約のことである。内部制約の「内部」とは、この意味である。そしてまたこの制約は、翻訳という作業を一つの独立した行動ならしめているものである²。言い換えれば、「翻訳が翻訳足る必要条件」ということである。この制約に違反したものは、もはや「翻訳」とは言えない³。

ただ、内部制約が必要条件であるということは、それだけでは充分条件とは言えないということの意味する。つまり、内部制約は必ず翻訳という作業に関わってくるのだが、それだけ守っていれば翻訳ができるというわけではない、ということである。通常一つの文・文章・作品には、同一言語への翻訳であっても複数のやりかたで翻訳が可能である(これを翻訳の多様性と呼ぶ)。だからこそある一つの海外の文学作品に対して様々な日本語訳が存在する、といった現象が生じるのである。このように複数存在する翻訳も、全てその過程において同じ内部制約が効かっていることは間違いないであろう。つまり、内部制約とは、「翻訳候補」の創作に必要なものなのであって、作品としていかなる翻訳を「完成品」とするか、ということには関与しない、ということである(ただしここで言う「翻訳」とはその産物のことであって、プロセスのことではない)。

また、同一文・文章・作品に対して複数の訳し方が存在するという事は、翻訳と言う作業の出発点にも内部制約は関与しないということが言える。つまり、ある言語Aにけるある文 $S_1(A)$ を別の言語Bに翻訳しようと試みた

²ただしこれはあくまで翻訳という「行動」の言語的な側面についていっているに過ぎない。本当の意味での「行動」的な定義は、心理言語学的な翻訳研究(e.g. Danks et al. 1997; Kiraly 1995; Neubert 1991)によって行われている。その中では、翻訳は一連の問題解決行動(problem-solving activity)であると看做されている。

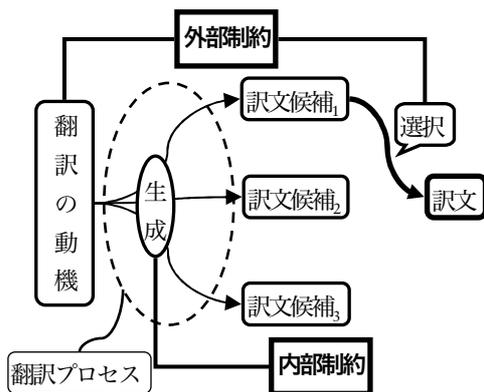
³そしておそらく「誤訳」とも言えないであろう。「誤訳」とは、翻訳というプロセスの「産物」であり、誤訳と正訳を分けているのは、一種の評価基準である。ここで問題にしているのは翻訳と言う営み、プロセスそれ自体なので、産物の正誤は問題にならない。

として、その出発点に内部制約がかかってくるとすれば、 $S_1(A)$ に対応付けられる言語Bの文(かそれに順ずるもの) $S_1(B)$ が自動的に生成されてしまうことになるが、事実はそのようではない、ということである。あくまで翻訳にはそれを実行するための「動機」が必要であり、明らかにこれは翻訳と言う作業内に閉じたものではないため、内部制約とは無関係に働くものである。議論を先取りして言えば、この「動機」にあたるものと、先に述べた複数の「翻訳候補」の中から一つを選択する役目を果たしているのが、次に述べる外部制約なのである。

その外部制約の概念的定義であるが、外部制約とは、当然ながら、商業的要因や訳者の好み、対象読者層といった、「翻訳と言う作業の外から作用する」制約のことである。外部制約の「外部」とは、この意味である。外部制約は、実質的に無限に存在しうるものであり、その意味では厳密な規定は不可能である。

外部制約は内部制約と異なり、翻訳という作業それ自体を規定するものにはなり得ない。むしろ、外部制約が働くのは、最終的な産物の選択、つまり、翻訳候補の選択である。いかなる翻訳も内部制約無しには生成され得ないが、ほとんどの場合、最終的に訳文を一つに選択するには外部制約が不可欠である。でなければ、先ほど述べた翻訳の多様性の問題が故に、いつまでも訳文を一つに選定することができなくなってしまう。内部制約というのは、言ってみれば無味乾燥な、単なる作業規定であり、そこには動機も目的もない。「何のために訳すか」ということが翻訳を動機付け、そしてまた結果できあがった形式を選定する基準になるのである。以下の図のようなイメージで捉えるのが分かりやすいであろうか。

(1) 翻訳という営みの全体の図式化



以上、まとめると、概略以下のようなよう：

(2) 内部制約とは

- a. 翻訳と言う作業内に閉じた制約であり

- b. 翻訳の候補生成に働くものである
- (3) 外部制約とは
- a. 翻訳と言う作業外から作用する制約であり
 - b. 翻訳の候補選択に働くものである

2.2. 操作的定義

このような制約の二分法を行うにあたって重要となるのは、その判別方法の確立である。それなしでは、ある制約が内的なのか外的なのかの判断が恣意的になる恐れがある。また、ある内部制約 R_1 が提案された際に、「内部制約である根拠はそれが理論で語れるからだ」というような循環論に陥る可能性がある。つまり、「 R_1 は内部制約なので理論で語ることができる」と言いながら「 R_1 は理論で語れるから内部制約である」と言っていることになってしまう、ということである。

このような事態を避けるためには、制約の判別方法の確立、つまり、外部制約・内部制約の操作的定義が必要となる。そこで本稿では、制約が内的か外的かを判断する基準として、「形式の決定可能性」というものを提案する。即ち、その制約を課した結果、訳文の形式が一義的に決定可能である場合は内的制約、不可能である場合は外的制約とする、というものである。以下、なぜこの判定基準が制約の内部・外部の峻別に役立つのかを説明した上で、実際にこれまで提案されてきた翻訳に係る制約を、内部制約に属するもの、外部制約に属するもの、の順で例示する。

2.2.1. 「形式の決定可能性」という基準の妥当性

なぜ「形式の決定可能性」というのが制約峻別の基準になりうるのだろうか。これには先に述べた内部制約と外部制約の概念的定義が大きく関わってくる。内部制約というのはその性質上スタート地点さえ定めれば自動的に訳文を生成してくれるメカニズムである。従って、確実に形式が一つに決定される。一方外部制約というのは、訳文という形式生成のまさにその現場には関与せず、そのスターティングポイントと最終地点を決定付けるだけである。つまり、形式の決定には寄与しない。最終地点である訳文の選択というのが一見「形式の決定」と思えるかもしれないが、これは誤りである。なぜなら訳文の選択においてはすでに形式が複数個決定されておりそのいずれかを選んでいくに過ぎず、決して形式そのものを規定しているわけではないからである。

2.2.2. 内部制約の例

例えば、「翻訳の際には訳語等を媒介項にして、目標言語においてその訳語と最も共起頻度の高い語を用いて訳

文を構築する」(「共起情報に基づく翻訳理論」吉川 2007; Yoshikawa 2007)というのは、訳語さえ与えられれば訳文の形式が決定されるという点で、内部制約として認められる。

2.2.3. 外部制約の例

一方、「翻訳の際は、原文と機能的に等価なものを訳文として構築すべきである」(functional equivalence theory, Nida & Waard 1986)というのは、いかなる形式が当該文脈において機能的に等価であるかを定めることができないという点で、外的制約として認められる。

3. 制約二分の意義

さて、これまで翻訳にかかる制約を如何に二分するのか、ということを見てきたが、では、そもそもなぜそういった制約の二分が必要なのであるか。本節では、制約二分の意義を確認し、確かにこの二分法がある種の必要性を持ったものであることを示す。

このような制約の二分法には、二つの点で意味がある。一つはメタ理論的な意義であり、もう一つは実用的な意義である。以下これを順に見ていく。

3.1. メタ理論的な意義

制約二分のメタ理論的な意義とはつまり、翻訳を理論で語る際の無用な混乱を避けることができる、ということである。例えば吉川(2007)やYoshikawa(2007)で提案されている「目標言語の共起情報に基づく制約」などは、前節で述べた通り翻訳の内部制約に当てはまるが、そこでは対象読者層や商業的要因、原著者・訳者の嗜好などの外的要因は全く考慮されていない。かといってその点でこの制約を不十分だと批判することは不毛である。いかなる読者層を対象としようとも、目的言語内の共起情報に違反した訳文というのは、訳文として受け入れられないものであり、そもそも訳者の頭の中に候補として上ることのないものであるからである。

3.2. 実用的な意義

制約二分の実用的な意義とはつまり、翻訳理論を計算機上で実装し、機械翻訳プログラムを作成する際に、この区別は有益である、ということである。翻訳の内部制約は、ルールとして記述可能であり、いかなる状況においても必ず適合するものであるため、これを計算機上に実装し、それ以外の、例えば対象読者層などの情報を、操作する人間が指定すればいいようにすれば、かなり高性能な機械翻訳が可能になると考えられる。

4. 制約の二分により説明される現象

翻訳にかかる制約をこのように二分することは、謂わば、翻訳という現象の「外」から見た限りにおいてのみ意味を成すように思われるかもしれない。確かに上に見たようなメタ理論的意義や実用的な意義というのはまさに「外」からみた評価であった。しかしながら、制約の二分法は、実は翻訳という現象自体にも説明を加えることができるものであると考えられる側面がある。つまり、翻訳という現象の一部を、この制約二分法によって説明することが可能である、ということである。このことは、翻訳にかかる制約の二分法が、単なるメタ理論的な道具立てを超えて、心的に実在するものであるということを示唆することに繋がる。

さて、では制約二分法によって説明される現象とはいったい何であろうか。それは、「翻訳による新表現の創出」という現象である。

4.1. 翻訳による新表現の創出

翻訳が内部制約に忠実に従う営みであるとすれば、訳者の生成した訳文というのは、目標言語の言語構造を忠実に守ったものであるということになる。その意味で、翻訳作品というのは「保守的」な性質を持ったものであると言えよう⁴。

しかしながら、そのような「保守的」なはずの翻訳から、目標言語にはそれまで存在していなかった新たな表現が創出される、という事態が生じることがある。例えば、乾(1974)が報告しているように、日本語には異言語の翻訳により生まれた表現が数多く存在している。これは語やイディオムのレベルに留まらず、構文や選択制限といった統語的なレベルにも広く見られる現象である。このことが示唆するのは、いささか比喩的な言い方をすれば、必ずしも翻訳と言う営みが内部制約に対して従順ではない、ということである。

では、このような「創造的」な翻訳を可能ならしめているのは一体何であろうか。筆者は、それが外部制約であると考えている。外部制約と内部制約は、互いに拮抗し合うものであり、創造的な翻訳が生まれるということは、「内部制約が外部制約に負けた」ということであると考えられるのだ。つまり、内部制約に忠実に従っては、どうしても外部制約から要請されるような表現が使えない、または外部制約から要請されるような意味が

⁴ 実際、筆者は翻訳家が「翻訳家は間違った日本語を使うと必要以上に叩かれるから、日本語の誤用には非常に神経を尖らせなければならない」といった趣旨の発言をしているのを見たことがある。

表せない、と考えられる場合内部制約違反が生じ、結果として新奇な表現が創出される、ということである。

これは、外部制約の要請というのがそもそも翻訳で表現(もしくは再現)すべき内容であり、内部制約というのはその実現において守らねばならない原則である、ということを考えれば、自然なことである。つまり、原則に縛られていては、本来の目的を達成できなくなってしまうわけであり、その限りにおいては、原則は破られうる、ということである。

5. 結語

以上のように、翻訳にかかる制約を内的・外的に二分することで、非常に複雑で多様性を孕む翻訳という営みを見事に解体し、その分析及び実装をより進展させることが可能になると考えられる。このような二分法は、一部の論者に意識はされていた(e.g. Zelinsky-Wibbelt 2003)ものの、決して明示されてこなかったものである。本稿の提案は、そのような曖昧模糊とした概念にはっきりとした形を与えたという意味で、非常に意義深いものである。

謝辞 本稿の内容は、昨年9月に関西学院大学にて開催された第20回社会言語科学会研究大会において筆者が行った口頭発表に対し、渡辺義和氏(南山大学)から頂いたご指摘を、筆者自身の「課題」と考え、その解答を模索する中で生まれたものである。従って、渡辺氏のコメントなくして本稿の内容は生まれていなかったものと筆者は考えている。この場を借りて、感謝の意を表したい。また、このような制約二分法が漠然と構築されてきた時分に、同輩の中村文紀氏(慶應義塾大学)と交わした議論はこの二分法を確固たるものとするのに非常に役に立った。中村氏にも謝意を表したい。

参考文献

- Danks, Joseph H., Shreve, Gregory M., Fountain, Stephen B., & McBeath, Michael K. (eds.) 1997. *Cognitive processes in translation and interpreting*. Thousand Oaks, Calif.: Sage Publications
- 池原悟. 2004. 機械翻訳. 長尾真他. 『言語情報処理』(pp. 95-148)東京: 岩波書店
- Kiraly, Donald C. 1995. *Pathways to translation: pedagogy and process*. Kent, Ohio: Kent State U. P.
- Kuroda, Kow. 2000. *Foundations of pattern matching analysis: a new method proposed for the cognitively realistic description of natural language syntax*. Unpublished Ph.D dissertation, University of Kyoto
- 乾亮一. 1974. 国語の表現に及ぼした英語の影響. 文化庁

(編) 『外国語と日本語』(pp.5-59) 東京: 教育出版

- Mandelblit, Nili. 1997. *Grammatical blending: creative and schematic aspects in sentence processing and translation*. Unpublished Ph.D dissertation, University of California, San Diego.
- Neubert, Albrecht. 1991. Models of translation. In Tirkkonen-Condit, Sonja. (ed.) *Empirical research in translation and intercultural studies* (pp. 17-26) Tubingen: Narr
- Nida, Eugene A. 1959. *Principles of translation as exemplified by bible translating*. In Brower, Reuben A. (ed.) *On Translation* (pp. 11-31) Cambridge: Harvard U. P.
- Nida, Eugene A., & Taber, Charles R. 1969. *The theory and practice of translation*. Leiden: E.J. Brill
- Nida, Eugene A., & Waard, Jan de. 1986. *From one language to another: functional equivalence in bible translation*. Nashville: Nelson
- 野美山浩. 1991. 目的言語の知識を用いた訳語選択とその学習性 『自然言語処理』86 (8), 1-8.
- 吉川正人. 2007. 翻訳はどこから来るのか: 日英対訳文対応付けデータに見る「訳語の力」 『社会言語科学会 第20回大会発表論文集』 pp. 122-125
- Yoshikawa, Masato. 2007. Where does a translation come from?: Presenting a case study for lexical collocation-based analysis of translation. *Colloquia*, 28, 43-60
- Zelinsky-Wibbelt, Cornelia. 2003. Integrating translation theory and translation practice. In Zelinsky-Wibbelt, Cornelia (ed.) *Text, context, concepts* (pp. 199- 220) Berlin; New York: Mouton de Gruyter

連絡先

吉川正人 machayoshikawa@dream.com